【誰ひとり取り残さない】

1人1人が自分らしく生きるために『選択』のできる社会を実現する

チーム名：Nagasaki Global Junior Innovators Team B
相庭　和花（中2）：体験、課題、解決のためのアイディア
齋藤　優輝（中1）：アンケート調査、集計、分析、追加・取材調査
諸藤　遥　（中1）：はじめに、現状

はじめに

ある日いつものように塾に行くと、チームメンバーの和花ちゃん（中2）が松葉杖をついていて、とても驚いた。塾で過ごしているのを見ていると、塾生が机の周りに荷物を置いているから、和花ちゃんはトイレに行ったり、先生に質問に行ったりするのに、とても不便そうで、大変そうに思った。和花ちゃんに話を聞くと、長い時間を過ごす学校での生活は、人も多いのでもっと大変だと言っていた。教室を移動するのには、階段の上り下りがあって時間がかかるため、今までできていたことができなくなったり、友だちにも助けてもわらないといけないため、いろいろと気を遣うことが多いらしい。

部活で捻挫したり、骨折したりして松葉杖になる人はよく見かける。和花ちゃんも一時的に松葉杖になっているけど、学校や周囲に小さいころからずっと、車いすや松葉杖という話を聞いたことがない。今の和花ちゃんを見ているだけでも大変そうなのに、生まれながらに足が不自由な人たちは、どのようにして普段の生活を過ごしているんだろう。和花ちゃんの話を聞いて、「足が不自由な人」たちの生活について疑問を持ったので、私たちは詳しく調べることにした。

日本と世界のバリアフリーの現状

【日本と世界の車いす事情】

日本には 400 万人を超える身体障害者がおり、その内車いすユーザーは約 200 万人(全人口の 1.57%)にも上ります。世界の車いすの総人口は約 1 億 2708 万人で、そのうち 65 歳以上の車椅子の人口は約 3300 万人です。

【日本と世界のバリアフリー】

日本のバリアフリーのレベルは、一概に高い、低いとは言えません。「エレベーターが多い」「段差が少ないのでラク」という意見がある一方、「車いすで入れる店が少ない」「エレベーターがない駅がある」という意見もあります。バリアフリーの設備・施設が増えてきてることは確かですが、どこに行ってもバリアフリーになっているとはまだ言えないのが、日本の今の現状です。

海外はどうでしょうか。例えば、香港では障害者がスムーズに生活できるように整えられつつあります。車いすのまま乗車可能なタクシーや、車いすスペースがあるフェリーなどがあります。また、「リハバス」といって、障害者が通勤・通学などをする際に、特別交通サービスが提供されています。

体験

私は最近、松葉杖になり、考えることがあります。

移動教室が大変。荷物や給食などで周りに迷惑をかけてしまっていないか心配。委員会の仕事に協力することができなかったり、周りの目も気にしてしまう。一時的に松葉杖になっただけでもこんなに大変!!だったら車椅子は、これ以上に大変なことが色々あるんじゃないのかな?でも、最近は車椅子の人も暮らしやすい社会になってきてるんじゃないの?でも本当に車椅子になってみないとわからない不便さもあるのかもしれない。そこで実際に車椅子で塾の近くの公園や商店街に出かけてみることにしました。

場所:長崎市平和町商店街周辺　　時間:午後　　天気:晴れ

【車椅子に乗った感想】

塾から、電柱など障害物をよけ横断歩道をわたり、商店街に行って、お店に入ったり、公園に入ったりしました。横断歩道を渡るのが特に怖く、後ろから車が来ても気づくことができませんでした。また、人や障害物にぶつからないように避けたり、段差に気を付けないといけなかったりで、とても疲れました。一人の時に困ることも多々ありました。自動販売機に手が届かない、店の道幅が狭くて入ることすらできない。商品が高いところにおいてあり一人ではとることができない。一人では超えることのできない段差が多くあったことに驚きでした。

車椅子に座ると目線が低くなり、車が横切るだけで、いつもよりとても怖く感じた。座っていると、振り返って、後ろから車が来ているかを確認することもむずかしかった。

狭い歩道にある電柱を避けようとすると、車道に大きくはみ出さなければならなくなり、とても怖い気持ちになった。また点字ブロックの上は車椅子では通りにくい。

横断歩道を渡ろうとすると、止まってくれる車が多かったが、急いで渡らないといけないと思って、余計に焦った。段差が大きくてなかなか登れず、車が渋滞してしまった。

この自動販売機は平地にあって、お金の投入口や商品の取り出し口が低いところにあったので便利だった。でも、一番高い商品のボタンを押せず、お茶は買えない。

店内の道幅が1m以上あると、ゆっくりと通ることができるが、人とすれ違うのは無理。1m以下だと、左右の商品に触れそうになる。高いところにある商品は取れない。

塾の入り口はゆるやかなスロープなので、大丈夫だと思っていたら、ドアを引かなければならなくて、ドアを引いて開けることができず、1人で入るのは無理だった。

【塾近くにある大きな公園】

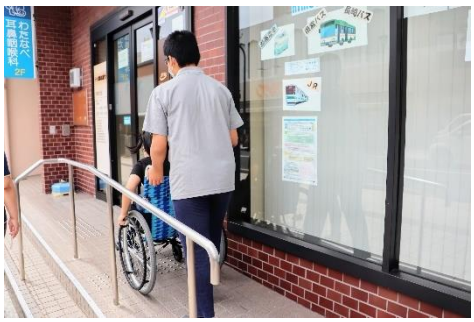
公園の入り口はいくつかあるけど、どこも階段か坂になっている。一番ゆるやかな坂を選んで入ったけど、1人で入ることはできなくて、押してもらわなければならない。

公園の中には「だれでもトイレ」がある。トイレの入り口はスロープになっているけれど、そこに行くまでに段差があって、やっぱり1人だけで行くのはむずかしかった。

中はとても広くて、車椅子で楽に動き回ることができた。手を洗うところも2つあって、使いやすいと感じた。

【バリアフリー店舗】

商店街の中にある銀行が「バリアフリー店舗」になっていると聞いたので、行ってみた。銀行の中はとても広くて、動きやすい。



銀行の入り口は階段とスロープがあって、手すりや点字ブロックもつけてあった。最初に車椅子の操作がむずかしい場所があって、やっぱり押してもらった。

入り口に、スロープからスロープへ切り替えしが必要な部分があって、角度もきついから、1人では時間もかかるし、怖いと感じた。銀行に入るまでが大変だった。

【車椅子を押した感想】

押す側も色々と大変なことがありました。急なスロープでは、車椅子を押すのに腕の力が必要だったり、曲がり角で車が来ていないか確認しようとすると車椅子が先に出てしまい危なかったです。押す側も、人、障害物、段差に気を付けなければならず大変でした。

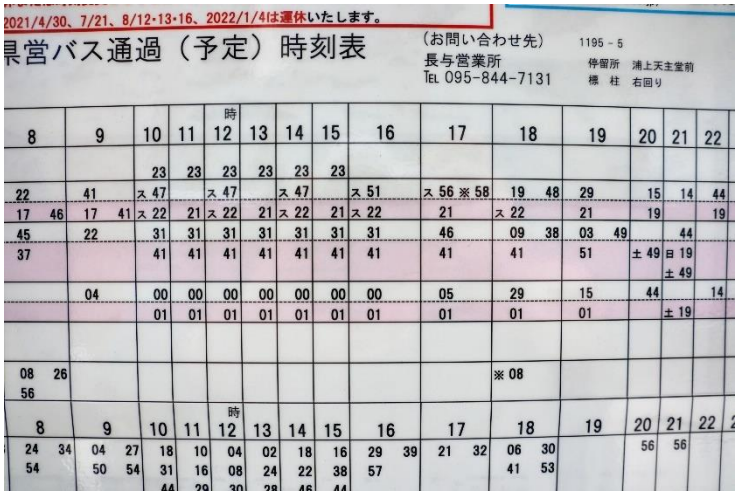
【車椅子を体験しての気づき】

入口がスロープになっていて、一見、車椅子にやさしい作りになっているけど、幅が狭い、急斜面過ぎて登れないなど、実際車椅子に乗ってみないとわからないような問題点がたくさん出てきました。車椅子に乗って、1人で出かけることは難しいと思いました。松葉杖での生活はとても大変。でも車椅子での生活はもっと大変。

足の不自由な人は車椅子さえあれば便利な生活ができている。私たちもそう思っていたし、そう思っている人が多いようですが、実際全然そんなことはありませんでした。普段の生活で車椅子の人をあまり見かけない理由がわかったような気がします。

追加調査

【車椅子のバスの利用状況】



車いすでのバス利用の現状を長崎県営バスに問い合わせた。市内を走るバスの台数は265台、そのうち車椅子が利用できるスロープバスは198台で全体の75%になった。H18 年にバリアフリー法が施行されたため、新規に導入するバスは スロープ付きでなくてはいけなくなったからだ。

しかし、交通局には車いす利用者の人数を把握した資料はなく、（運転手さんに質問したところ１か月に１回乗せるか乗せないかくらいの人数だということがわかった）、時刻表に占めるスロープバス表示の割合は 2.8%。10時～18時までの間にたった５本しかなかった。スロープバスが運行される時刻には「ス」と表示されている。しかし、時刻表に「ス」が付いていなくても、スロープバスが来れば乗れるらしい。なので、本当はもっとスロープバスは運行されている。時刻表の「ス」は、確実にスロープバスに乗れる時刻だそうだ。

しかし、スロープバスが走っているのに、車椅子の人の利用が少ないのはなぜだろう。

【公立小中学校でのバリアフリー化の状況】

文部科学省の「公立小中学校しせつにおけるバリアフリー化の状況調査」では、全国の 28,131 の学校のうち、エレベーターが付いている学校は全体の 27%にあたる 7,610 校。車いす用のトイレが設置してある学校は、65%の 18,292 校であった。

しかし、驚くことに通学に配慮が必要な児童生徒等が在籍する 6,451 校のうち、エレベーターが付いている学校は 40.5%の 2,611 校。車いす用トイレが設置してある学校は、78%の 5,031 校だった。

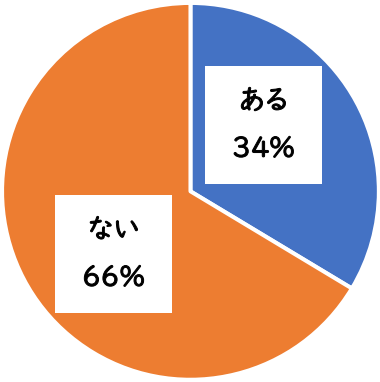
【追加調査をしての気づきや疑問点】

・スロープバスはあまり見かけないので少ないと思っていたら、僕たちが想像していた以上に多かった。
・だけど時刻表にスロープバスは１時間に１本程度しか走っていなかった。
・時刻表のスロープバスは〇時から〇時までの限定した時間であるのはなぜだろう。
・利用者数が少ないのは、そのバスが定刻以外走っていることを知らないこともあるのだろうか。

・エレベーターの設置率があまりにも低すぎる。1階しか動かなくていいように工夫してるのだろうか。
・車いすで支援が必要な子が通っていても専用トイレの設置率は８割に満たない。学校でトイレを利用したいときはどうしているのだろう。

アンケート調査

【日常生活で不平等だと感じることがあるか】



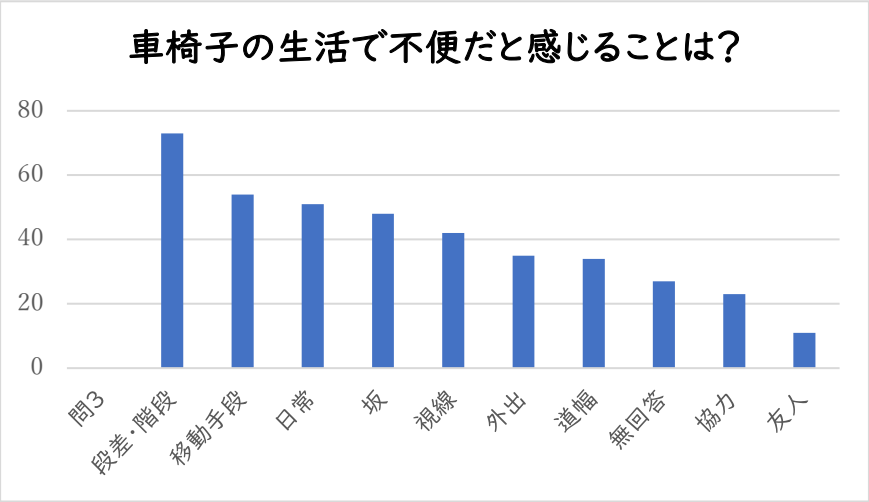
【みんなは不平等を感じているのか】

僕たちは長崎市の中高生 116 人にアンケート調査を実施した。

日常生活の中で不平等だと感じている人、39 人。不平等を感じていない人、77 人であった。こう見ると不平等だと感じている人は、感じていない人よりも少なく、全体の3分の1程度であることが分かった。

また、不平等だと感じる内容については、男女の差や年齢の差から感じる不平等をあげる人が半分以上を占めた。

【車いすや松葉杖の生活について】



今までに松葉杖や車いすを利用したことがある人は、全体の 25%。

松葉杖や車いすの生活でどんなことが大変だったか、またどんなことが大変だと思うかの問いには、【階段・段差】【移動手段】【坂】など、日常生活に関係することを答えた人が、全体の半分以上になった。この結果は、車椅子体験を通して感じたことに近く、松葉杖や車椅子を使ったことがない人でも、その不便さは想像できるものが多かったみたいだ。

しかし、【周囲から協力を得ること】や【友人との関係】など、実際に松葉杖や車椅子で生活してみなくては分からないことは、どちらも5%前後と低い数字となった。

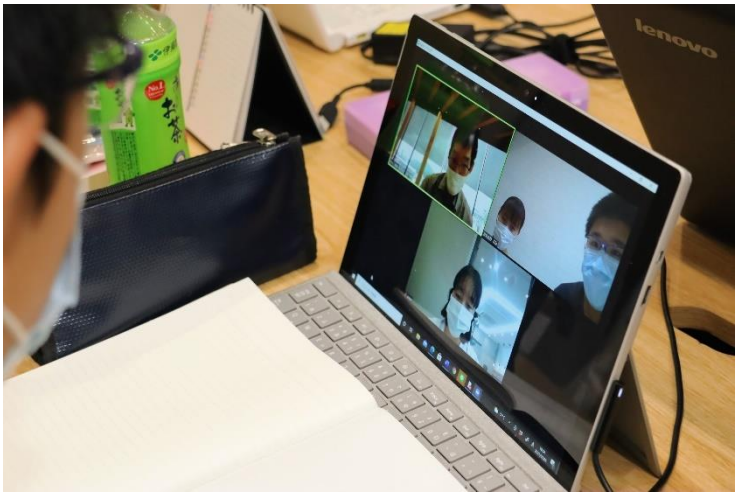
【不平等はなくすべきか】

100 人のうち不平等を感じている 3 人のために行動を起こすべきかの問いに、全体の 70%の人は、お金や時間をかけても不平等をなくすための行動を起こしたいと考えており、理由は 3 人でも不平等を感じていればそれは平等ではないから、楽しく幸せな生活を送れるから、可哀そう、助けたいだった。しかし、その中の 9%の人は、行動を起こすべきだと思うが、行動を起こしたいと思わないと答えた。理由は、「子どもだからお金がない」、「具体的に何をしたらいいかわからない」だった。

行動を起こす必要がない人は 30%。主な理由は、「3 人のために行動することが逆に不平等になるから」、「不平等を感じていない人が多いので不平等とは言えないと思うから」、「困っている人が自分でどうにかする」だった。

取材調査

僕たちが体験で感じたこと、アンケート調査でわかった同年代のみんなが感じていることは、実際、日常生活で車いすを利用している方の感じ方と同じなんだろうか。僕たちは、自分たちの勝手な思い込みやイメージを持ってはいないんだろうか。



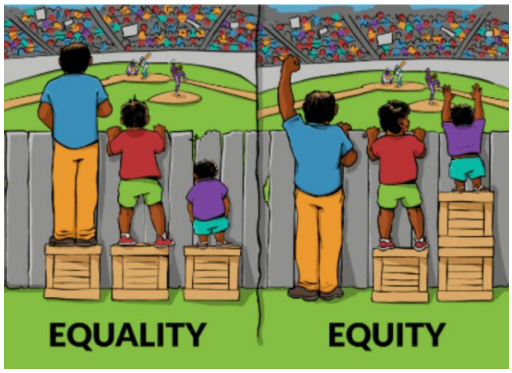
左上が常田さん。夕方、県庁からリモート会議に参加してくださった。

【取材調査】

そこで、僕たちは、普段、車いすでお仕事をされている長崎県庁の常田さんに、車いすでの生活について、リモートでお話を伺うことにした。

長崎県庁でお仕事をするときには、あまり不便は感じていないようだ。段差・階段、坂道は、やはり利用するにあたって困るが、日常生活では事前に車いすが入れるお店を選んでおく、周囲の人へ介助をお願いするなどの工夫をすることで、あまり不便は感じていないと言っていた。市内の公立小中学校から、市内の私立高校、私立大学へ進学した常田さんは、お友だちのサポートや学校がエレベーターを設置してくれたこともあり、楽しく学校へ通うことができたと話す。将来はロボットをつくる仕事をしたかったそうだが、車いすで取り組むには難しいと判断し、コンピュータを使ってできる事務の仕事を選んだそうだ。

そのうえで、常田さんは、「平等」と「公平」は同じではないこと、過剰なサポートは必要ではなく、「合理的配慮」という考え方を知り、本当に助けが必要かを1度立ち止まって考えて欲しいと言っていた。わからないときは「何かお手伝いしましょうか」と聞いてみたらいいんじゃないかな?ともアドバイスしてくださった。



EQUALITY（平等）と EQUITY（公平）の違い

常田さんに取材して話を聞くまでは、車いす利用者の方は、道路の整備や公共交通機関の利用などをはじめ日常生活の制約が多いと思っていたので、毎日不便を感じていて、こうして欲しいなともっと要望があるものだと思っていた。しかし、何でも便利にしてもらいたいと思っているわけではないこと、協力を得られにくかったり、友人との関係で困ったりすることはないなど、常田さんの話を聞いてから、僕は「車いすを使っている人々はひどく不平等を感じている」と思い込んでいたことに気づいた。どうしてそのように思い込んでいたんだろう。

調査から見えてきた問題点

【調査からの気づき】

・車椅子での生活は想像以上に大変だった。体験してみないと、車椅子での生活の大変さはわからない
・車椅子の人たちが利用するものには、場所や時間が限定されているものが多いように感じた
・学校の設備やまちづくりが、車いすの人も一緒に何かをするという前提で、いろいろと考えられてない
・車椅子の人たちは、サポートがあって便利な生活が送れていると思っている人もいる
・自分には関係ない、もしくは少数の人たちよりも大多数の人たちを優先すべきだと考えている人もいる

【調査からの疑問点】

・車椅子の人たちと一緒に何でもできるように、改善されないのはなぜだろう
・車椅子の人たちは、一緒に何かをできなくて当然だと思っているのか
・車椅子の人たちはとても不平等を感じていると思ってしまったのはなぜだろう
・車椅子の人たちは少数だから多数の人を優先すべきという考えは正しいのか
・少数の人のために不平等を改善することは、多数の人のためにはならないのか
・少数の人たちが利用するものに、場所や時間を限定してしまうのはなぜなのか
・平等と公平について、みんながその違いをわかっていないから、改善できないのではないか
・市議会や県議会など政策を作る人の中に車椅子の人が少ないから、まちづくりなどで意見が反映されにくいのでは

↓

全国47都道府県議会と20政令市議会で、障がいを持ち活動する地方議員は、車椅子利用者7人、視覚障害者1人。計67議会の総定数に占める割合は約0.2%にとどまっている。障がい者の議員数に関しては公的なデータがなく、他に内部障害のある議員などがいることも想定されるが、障害者の議会進出が極めて限定的となっている実態がうかがえる。

（2017年12月24日毎日新聞）

私たちが取り組むべき課題

私たちは、調査から気づいたことや疑問に思ったことを3人で話し合い、取り組むべき課題を決めました。

社会全体が効率性を優先に考えてしまい
問題を抱える少数の人たちを前提に
「まちづくり」「生活づくり」が考えようとしないため
一部の人が不平等を感じてしまう社会になっている

平等な社会を実現するために必要な考え方

【私たちの中にある無意識の思い込みやイメージ】

私たちは、課題を解決して平等な社会を実現するために、どんなアイディアがあるだろうと話し合いました。私たちはいろいろなアイディアを出したのですが、「それは車椅子の人には無理なんじゃない？」「それも車椅子の人にはできないんじゃない？」と言って、最初アイディアをまとめることができませんでした。

そこで、私たちは「私たちの中に、車椅子の人や、体に障がいがあって不自由な生活を送る人は、私たちのように、行動することは無理なのではないか」という、無意識の思い込みやイメージがあることに気づきました。車椅子に乗った体験を思い出すと、思っていた以上に道路には段差や障害物があって大変だったけれど、手伝ってくれたり、声をかけてくれたりする人も多くて、慣れてくれば、とても楽になりました。体験してみて、無理だったことは改善すればいいし、予想以上にできたことはもっと広めていくことが大切だと思いました。

【『できるか、できないか』ではなく、『どうやったらできるか』】

車椅子に乗って買い物をしたいけど、お店で高いところの商品が取れないから、人が多くて邪魔になるから、お店に買い物に行かない。好きな仕事をしたいけど、スポーツにチャレンジしたいけど、車椅子だと自由に動き回れないから、したいことをあきらめる。私たちは『できるか、できないか』を考えてばかりいて、『どうやったらできるか』について、あまり考えていないと思いました。『できるか、できないか』の2択ではなく、『できる』ことを前提にして、『どんな方法を使ったら、どんな道具を使ったらできるのか』と考えを変え、いろいろな選択肢を増やすことは、障がいのある人にとっても、障がいが今はない人にとっても、すべての人が暮らしやすい社会になると思いました。

平等な社会を実現するためのアイディア

私たちは、平等な社会を実現するために『選択肢を増やすこと』を提案します。

私は、松葉杖になってとても不便な生活をしています。友だちから「大変だね」と言われるけれど、みんなも、いつ怪我や事故にあって、松葉杖や車いすの生活になるかもしれない。私たちもいつかは年をとって、足が悪くなって、今みたいに歩けなくなります。まちづくりが、少数の人たちのことも考えて行われたら、誰にとっても便利なまちになると思います。段差がない道路は、車いすの人だけでなく、足が不自由な人やベビーカーを押している人にとっても、暮らしやすいです。エレベーターがあれば、荷物をたくさん運ぶ人や具合が悪い人にとっても便利です。段差がある道を通りたい人は段差がある道を選ぶ、エレベーターを使いたくない人は使わなくていいです。杖を使うか、松葉杖を使うか、車椅子を使うか、義足を使うか、どれを使って歩いてもいいと思います。出かけるか、出かけないかではなく、出かけるのであれば、車椅子で1人で出かけるか、人についてきてもらうかというような選択もいいと思います。

選択肢を増やすことは、常田さんがおっしゃっていた「平等」と「公平」にもあてはまると思います。みんなに平等に何かを準備するのではなくて、必要な人に、必要な分を選択してもらって「公平」にすることにつながると思います。

『選択肢』を増やすためのアイディア

平等な社会を実現するために『選択肢を増やす』

このアイデアを実現するために必要なことを、具体的に考えました。

【1・障がいのある人の生活を体験してもらう】

実際に障がいのある人の生活を経験してみると、障がいがある人が、普段、生活している上で困っていること、本当に必要としているものがわかると思います。

私は、車椅子に乗っていたとき、後ろから押してもらって楽だと思ったけど、スピードが速くて怖いと感じました。横断歩道を渡るとき、車がまってくれて、急がなくちゃと気持ちがあせって、段差をのぼることができませんでした。障がいがある人が、どう思うのかなど気持ちを理解することができれば、みんなも手助けがしやすくなります。

学校で、避難訓練があるように、障がいのある人の生活を体験するような行事を行うようにするといいと思います。

普段から、そのような生活が身近にあることを知ることが大切だと思います。

【2・障がいのある人が助けを求めやすい仕組みをつくる】

「お手伝いをしたいけど、声をかける勇気がない」という声を聞きました。反対に、「手伝ってほしいけど、周囲が忙しそうにしていて、声をかけにくいときがある」という声も聞きました。お手伝いしたい人、お手伝いしほしい人、お互いが遠慮してしまっている状況があるみたいです。そこで、助けてほしいときに挙げることのできるヘルプカードを作るなど、お互いに、声をあげやすい、声をかけやすい工夫をしたらいいと思います。

【3・たくさんのコストと、長い時間がかかってもやり遂げるために、政治に参加する】

誰もが暮らしやすい世界。それを実現するには、たくさんのコストと時間が必要です。

しかし誰もが年をとり、誰もが障がいをおう可能性はあります。いつ自分が障がい者になってもおかしくはありません。今解決しておけば未来にもつながり、さらに良い未来につながると思います。ゆっくりと時間をかけながら長期的に。私たちの未来のためにもやり遂げるということを、みんなで確認することが大切です。

そして、そのような社会をつくるためには、そのような社会を実現するための政策が必要です。だから、選挙に行くなど、政治にも積極的に関わることをすすめたいと思います。また、障がいがある人たちが、政治に積極的に関われるような仕組みも考えていくことが大切だと思います。

最後に

日本でもまだまだ進んでいないバリアフリー。アジアやアフリカなど、一部の後進国では、足が悪い子はどうやって学校へ通っているのだろう。まだまだ私たちは、他の国についても調査を進めていきたいと思います。そして、知ったことや考えたことを、どんどん発信していきたいです。

【参考 URL】

Accessible Lab：https://accessible-labo.org/works-information/

WHILL お役立ちコラム：https://whill.inc/jp/column/19_overseas-wheelchair